

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Michaela Kreyenfeld, Dirk Konietzka (eds.)

*Childlessness in Europe: Contexts, Causes, and Consequences*

Demographic Research Monographs, SpringerOpen, 2017, 370pp.

本書は、ここ数十年でヨーロッパやアメリカで急速に増加してきた「無子の人々」に注目し、5部立て・全17章の無子研究論文をとりまとめた著作である。

パートI「ヨーロッパにおける無子の概観」には、ヨーロッパの無子に関する論点、定義、本書各章の要約をまとめた第1章(M. Kreyenfeld & D. Konietzka)と、ヨーロッパ28ヶ国の無子レベルに関する長期データの分析を扱った第2章(T. Sobotka)が掲載されている。とくに第2章は有用で、綿密に収集された各国の長期データに基づいて出生コーホート別分析が行われ、1900年~72年生れの女性の無子割合は1940年代出生コーホートを底としてU字型を描くことを明らかにした。また、無子に関するデータ自体の解説も含まれ、大変参考になる。

パートII「各国の状況」には、国別に無子レベルの動向、家族制度との関連、無子の要因分析などを行った研究論文が掲載されており、イギリス(第3章, A. Berrington)、フランス(第4章, K. Köppen, M. Mazuy, and L. Toulemon)、東西ドイツ(第5章, M. Kreyenfeld and D. Konietzka)、スイスとオーストリア(第6章, M. Burkimsher and K. Zeman)、フィンランド(第7章, A. Rotkirch and A. Miettinen)、アメリカ(第8章, T. Frejka)が取り上げられた。各国研究に共通して、無子と学歴の関連について言及されている。一般に、女性では高学歴者ほど無子割合が高いと多くの研究で指摘されてきた。スイス・オーストリア、ドイツ、フランスでは、学歴間の差は縮小しているもののその通りのデータが示されたが、フィンランドでは低学歴者で無子割合が高い。男性は多くの国で低学歴者に無子が多い。学歴と無子の関係性は様々であり、その背後には学歴別のパートナーの得やすさの問題もある。また、イギリス(第3章)とアメリカ(第8章)では、若い世代で無子割合の上昇が反転し、低下し始めている兆しが見出されており、印象的であった。

パートIII「女性の教育と無子」・IV「出生力の理想、ライフコースを通じた意思決定、生殖補助医療」は、現代ヨーロッパにおける無子の決定要因を分析した論文が掲載されている。パートIIIの第9章(G. Neyer, J. M. Hoem and G. Andersson)は、教育制度が大きく異なるオーストリアとスウェーデンの教育分野と無子の関連を分析した。両国とも教育分野による無子割合の差が観察されており、学歴水準だけでなくどの分野を学んだかという視点も重要であることがわかる。第10章(H. Schaeper, M. Grotheer and G. Brandt)では、東西ドイツの大卒女性の出生行動を比較分析しており、ドイツ統一前は若くして結婚・出産することが多かった東独大卒女性が、統一後は保育サービスや子育て支援の減退、卒業後のキャリア見通しの不確実性の増大により、西独と同じく若い時期の出生割合が激減していることが見出された。

パートIVの第11章(A. -K. Kuhnt, M. Kreyenfeld and H. Trappe)では、ドイツ家族パネルのデータを使用して、「理想出生力」がライフコースを通じてどのように変化するか分析した。女性は男性よりも加齢に伴い理想子ども数が減少する傾向にあり、理想子ども数の変化には子供の誕生(特に第一子)の影響が大きく、経済要因はあまり影響しないようだ。第12章(L. Bernardi and S. Keim)はドイツの高学歴・常勤女性へのインタビュー調査から、東西ドイツ人では将来の家族生活イメージ

が大きく異なり（西独は男性稼ぎ手モデル，東独は共働きモデル），それは統一後も残存していることを明らかにした．第13章（H. Trappe）と第14章（P. Präg and M.C. Mills）はともに生殖補助医療（ART）について扱っており，第13章ではドイツ，第14章ではヨーロッパ全体の ART の状況と ART に関連する法律規制等についてまとめている．ヨーロッパでは域内移動が容易であるため，各国の法規制の違いと個人の経済力の有無が ART へのアクセスを規定している側面があるという．

パートV「無子の帰結」は，無子であることが高齢期にどのような心理的・経済的帰結を示すのかを分析した3つの論文で構成されている．こうした分析視点の研究は日本ではまだ少なく，興味深い．第15章（R. Keizer and K. Ivanova）は，オランダの男女を分析し，男性は女性に比べて，無子であることよりも，パートナーの有無やカップルの関係性の質が精神的・身体的ウェルビーイングに影響するとした．第16章（T. Mika and C. Czaplicki）は，東西ドイツの女性を比較分析し，西独では子どもを持つと就業経歴に影響して「出産ペナルティ」により老年期所得に差が生じるが，東独では出産ペナルティは観察されなかったことを示した．第17章（M. Albertini and M. Kohli）は，無子の高齢者は社会的孤立から公的支援需要が高い集団とみられてきたが，実はボランティア活動等を通じて周囲にサポートを提供する側でもあること，むしろ子どもがいてもつながりが切れている高齢者で公的支援需要が高まるリスクがあることを見出した．

日本では，無子に関する研究はおもに2000年代以降に盛んになってきたが，欧米諸国では1970～80年代頃から多数の無子研究が蓄積されている．本書ではその先行研究の厚みを感じ取れ，日本における今後の無子研究にとって大いに参考になる一冊といえる．また，社会調査と公的な人口登録データをリンクさせたデータセットで分析を行った論文もあり，こうしたデータは日本にはなく，興味深い．なお，本書はオープンアクセスとなっており，次の URL からコンテンツすべてがフリーで PDF ダウンロード可能である．<https://www.springer.com/gp/book/9783319446653> （守泉理恵）